

# 説経「をぐり」訓釈（下）

——小栗の再生・栄達まで

大内 建彦

横山、姫を沈めにかける

（承前）

横山はこのことをご覧になって、「今まさに気が晴れた」。小栗主従も聞いた武士たちなので、陰陽師の博士を呼んでお問いなさる。博士参つて占つていうには、「十人の殿方たちは、ご主君の最後にかかり合い、法にはずれた死を遂げられたのですから、これの死体を火葬になさいませ。小栗一人は名うての大将ということもありますので、その死体は土葬になさいませ」とされたのは、再び小栗殿の将来の繁栄を占うものであった。

横山はこのことをお聞きになって、「それこそたやすいことだ」とばかり、土葬火葬と、野辺の送りを早くしおえて、鬼王・鬼次兄弟を御前に召して、「やあ、どうだ兄弟よ。人の子を殺しておいて、我が子を殺さないでは、都の手前外聞もあるから、不憫には思うが、

あの照手の姫の命も、相模川のおりからが淵に、石を付けて沈めて参れ、兄弟」とのお達しである。

ああおいたわしい兄弟は、なんともいふべき言葉もなくて、今更何も申すまい宮仕え（のつらさ）をと、われら兄弟は、義理の前には、身を分けた親でさえ、背いて（子を）殺そうとされる世の中に、（家来が主君の姫を手にかけるのも仕方がないかと）それでは沈めにかけることにしようと思つて、あつさり承知なさり、照手姫の部屋へいらつしやつて、「のう、どうです照手様。さて夫の小栗殿、十人の殿方たちは、蓬萊山の飾り物のされたお座敷で、殺されなされたぞ。（あなた様もどうぞ）お覚悟をなされ、照手様」。

照手はこのことをお聞きになつて、「何と申されます（あなた方）ご兄弟は。このような重大事の折も折、間近く寄つて事の次第を申せ。さて夫の小栗殿、その十人の殿方たちは、蓬萊山の飾られたお座敷で、殺されたと申すのですか。何と悲しい次第でしょう。この私がいゝろと申し上げたのに、最後までお聞き届けにならないので、この憂き目の悲しいこと、（それを）少しでも知つていれば、蓬萊山の座敷へ参つて、夫の小栗の殿様が、最後にお抜きになつた刀をば、胸元へと突きたてて、死出の旅の三途の大川を、手を取りあつて、ご一緒にいれば、今の辛い目にあうことはよもやなかつたでしように」。泣いては口説き口説いては泣きなされるが、もはや嘆いてもそのかいもないと、膝ひざの紋所のつい

\*〔平〕、〔新〕、〔岩〕どれもが横模川の淵の名称かとするが、不詳。

た所々色の濃淡のある小袖、それを一かきね取り出して、「ねえ、どうでしょうご兄弟。これはご兄弟にあげましょう。恩愛<sup>\*</sup>の主の形見として、思い出した折々には、どうぞ念仏を唱えて供養して下さい。唐の鏡や、十二の手箱に入れた手廻りの道具の品々をば、上の山寺（箱根権現？）へ奉納し、姫<sup>わかし</sup>の亡きあと、弔<sup>なぐさ</sup>つて下さいよ。憂き世に永らえていれば夫小栗への想いもいや増す、姫<sup>わかし</sup>の末期を早めましょう」と、自ら牢輿<sup>こし</sup>にお乗りになると、御乳や乳母や、水仕事をする下女まで、「私も子供をいたしましょう」、「私もお供します」と、輿<sup>なぐさ</sup>の轅（長い柄）にすがりつき、皆さめざめと泣いておられる。

照手はこの様をご覧になつて、「もつともなことよ女房たち、隣国他国の者でさえ、慣れ親しめば名残惜しいもの、ましてや御乳や乳母のこととなれば、名残惜しいも無理からぬこと、（私に）皆の千万の命を下さるより、（私が水に投げ入れられて）沖の水がぱつと鳴つたなら、ああ今が照手の最後かと、鉦鼓<sup>た</sup>を叩きうち鳴らして、念仏供養をして下さい。憂き世にあれば却つて想いも増す、姫<sup>わかし</sup>の最期をどうか早く」と、お急ぎになると程なく、相模川へとお着きになる。

相模川にお着きになると、小船を一艘<sup>ふね</sup>川面におろし、（姫の）牢輿をそれにお乗せして、櫓を押し漕ぐその船の、からりころりという音に、驚いて、沖の鷗がぱつと飛び立つ、渚の千鳥は友を呼び交す。照手はこの様をご覧になって、「あの千鳥でさえ、（千鳥よ）恋し

\*〔平〕、〔新〕はともに「恩無い主」と解し、「恩を受けぬ主人」の意とする。

い友を呼んでいるというのに、ああこの私は、誰を頼りにして、おりからが淵へ急ぐのか」と泣きつ口説きつなされるが、お急ぎになったので程なく、おりからが淵へとお着きになる。

おりからが淵に着いたので、ああおいたわしい兄弟は、ここに沈めかけようか、あそこに沈めかけようかと、沈めかねた様子であるよ。兄の鬼王が、弟の鬼次を近付けて、「やあ、どうだ鬼次よ。あの牢輿の内にある照手の姫の姿を見申し上げると、昇る日の光につぼみをもつ花のようだ。そして我ら二人の姿を見れば、入り日に散る花のごとくだ。

いっそさあ命を助けてさし上げよう。命を助けたる咎<sup>とが</sup>として、罪科に問われるとしても、

それはそれで仕方ないことだ」。(鬼次)「そういうことなら命をお助け申そう」と、前後につけた沈めの石を切放ち、牢輿だけを突き流す。こちら岸におられる人々は、「今こそ照手の姫の最期よ」と、鉦鼓をうち叩き、念仏を唱え、一せいにわつと泣き叫ぶ声、頃は六月半ばのこと、蚊の鳴く声もこれには勝てないほどに耳に残る。

ああおいたわしい照手の姫は、さて牢輿の内からも、西に向って手を合わせ、「観音経の要文(経文中の大切な文句)にこうあります、五逆消滅、種々淨罪、一切衆生、即身成仏と。どうぞよき島に打ち上げて下さいまし」と、この文句をお唱えなさると、観音様もこれを哀れとおもわれて、風のまにまに吹かれゆくほどに、ゆきとせが浦に吹き寄せられて着く。

ゆきとせが浦の漁師たちはこれを見て、「どこからかお祭りをして流したのだわい(そ

れが流れついたのだろう。見てまいれ」と申します。若き船頭たちは「承知しました」と見にやらされると（帰つての報告に）、「牢輿に口がない」と申します。親方たちはこれを聞き、「口がないならうち壊してみよ」と申される。（船頭たちは）「承知しました」と、櫓で打ち壊してみれば、中には楊柳が風に吹かれたような（うら若い）姫が一人、涙ぐんでいらつしやる。親方たちはこれを見て、「だから言わぬことじゃない。このころこの浦に漁が不振だったのは、その女のせいだ。悪魔か化け物か、あるいは龍神の類か、口をわれ口をわれ」と、櫓で打ちつける。

その中に漁師の長たる太夫殿と申す人は、慈悲あつた人であるので、その姫の泣く声をつくづくと聞いて、「のう、どうだ船頭たち。あの姫の泣く声をつくづく聞くにつけ、悪魔でも化け物でもない。あるいは龍神の類でもない。どこからか継母が継子との仲を讒言したことによつて、流されてきた姫と見受ける。ご存知のように、この私は子供のいない身でもあるので、末々養子として老後を頼もうと思う。どうか私に賜りたい」と、大夫は照手姫を自分の家におつれになり、老妻を近付けて、「のう、どうだ妻よ。浜から養女をもらつて連れてきたから、心よく養育してやつてくれ」と申される。

姥はこの由を聞くが早いか、「ねえ、どうでしょう太夫殿。それ養子などと申すものは、山へ行つては木を伐り出し、浜へ出ては、太夫殿の相方として櫓を押すような、十七、八歳の子供こそ、よき行末を頼める養子と申します。あのように楊柳が、さも風に吹かれたような姫をば、六浦の浦の商人に、銭一貫文か二貫文で、さつさとたたき売れば、銭も儲

けられるし、（それこそ）よき行末の養子といえるのではありませんか、太夫いかがです」と申します。

太夫はこの由を聞き、あの姥なる者は、子供があればあるで勝手をいい、なければないで勝手を言う。「お前のような、邪見な姥とつれ添うて、もろとも悪魔の道へ落ちるより、家・財宝は、姥とのお別れに進呈する」と、太夫と照手姫は諸国修行の旅に出ようとする。姥はこの由を聞くが早いか、太夫を失つては大変とばかり、「ねえ、どうか太夫殿。今のは冗談ですよ。あなたも私も子供のいない身の上、われらの行末の養子と頼みにしましように。どうぞお戻り下さい、太夫殿」。太夫は正直な人なので、（その言葉を真にうけて）お戻りになり、自分の仕事とばかり、沖へ釣にお出かけになった。その後で、姥が企む謀反こそ恐ろしいことこの上ない。

そもそも男というものは、（女の）色黒が好みじゃないという。あの姥が色黒になって、太夫に愛想づかしをさせようと考えて、（姫を）浜辺の道へお連れして、塩焼き小屋のかまどの上の天井へ追いやつて、生松葉をかき集めて、（それを燃して）その日一日燻いぶされる。

ああおいたわしい照手姫。煙が目や口へ入る様は、なにかに譬える方途もない。なに分照る日月の申し子のことなので、千手観音が、身辺を離れずお立ちになって（姫を守つて）いるので、ちっとも煙たくはない。夕暮れ時になったので、姥は「姫降りなさい」と（降ろして）見てみると、白い花に、薄墨をさつとはいって塗つたように、より一層美人の姫と

なつておられる。

姥この由を見るが早いか、さてさて私は、今日は全くむだ骨を折つたことの腹立たしいことよ。すぐにも売つてしまおうと思いつめ、六浦の浦の商人に、銭二貫文で、さつさと売つぱらつて銭を儲け、胸の嫉妬の焰はおさまつたが、太夫の手前の言い訳に、はたとつまつてしまつたよ。そうそう、昔から今に伝えてよく聞くことに、七尋しちひろの島に八尋の舟をつなぐ（不可能なことを可能にする）というよ、これも女人の知恵の働かせどころ、上手に話をしてみようと（太夫を）待ちうけている。

太夫は釣りからお戻りになつて、「姫はどこだ、姫は」とお尋ねになる。姥はこの由を聞くが早いか、「ねえ、どうか太夫殿、今朝、姫はあなたの後を追つてついで来ましたが、若き身空のこととて、海に身を投げたのやら、六浦の浦の商人が、舟に乗せて連れて行つたのやら、（これまで）安氣に暮らしてきたこの姥に心労をかけさせるよ（あの姫は）、ねえ太夫」と、さつそく姥は空泣きを開始してみせる。

太夫は、この由を聞いて、「のう、姥よ。心底から悲しくて、こぼれる涙は、九万九千の身の毛穴という毛穴が開いて、潤いあふれてこぼれるもの。お前の涙のこぼれようといへば、六浦の浦の商人に、銭一貫文か二貫文で、さつさと売りはらつて、銭を儲けた上の、うわべだけの、憂えてみせた空涙と見受けるが、どうしてこの太夫が片目なものか。お前のような邪見な奴と連れ添つて、二人して悪魔の道へ転落したりするよりは、家、財宝は姥との離縁の代償に進呈する」と、太夫は髻もとしりを切り、（それを）西の方（西方極楽浄土）

へ投げ、濃い墨染めの衣に着替えて、鉦鼓を取って首にかけ、山里に隠棲して、来世の安楽を請い願っておられたが、人々は皆これをご覧になって、漁師の長のこの太夫殿を褒めない者などどこにもいない。

以上は太夫殿の御物語。(それは)さておき申して、殊更哀れをとどめたのは、六浦の浦にいらつしやる、照手の姫にして、あらん限りの哀れをとどめている。ああおいたわしい照手の姫を、六浦の浦にも買い留めておかず、釣竿<sup>\*1</sup>の島へと買ってゆく。(そして更に)釣竿の島の商人が、値が高くなったら売れよとて、鬼の塩谷<sup>\*2</sup>へと買ってゆく。(今度は)鬼の塩谷の商人が、値が高くなったら売れよとて、岩瀬<sup>\*3</sup>、水橋、六渡寺、氷見の商家へと(次から次へと)買ってゆく。氷見の商家の商人が、(照手は)何の能力もない、手に職もないということで、能登の国とやらの、珠洲の岬へと買ってゆく。

ああ面白い里の名よ、よしはら、<sup>\*4</sup>さまたけ、りんこうし、<sup>\*5</sup>宮の腰にも買ってゆく。宮の腰の商人、値が高くなったら売れよとて、加賀の国とやらの本折、小松へと買ってゆく。本折、小松の商人が値が高くなったら売れよとて、越前の国とやらの三国の港へと買って

\*1 「平」、(新)、(岩)とも、地名未詳とする。

\*2 「平」、(新)、(岩)とも、新潟県岩船郡内の地名かとするが未詳。

\*3 このあたりの地名は、富山県内の日本海沿岸地域の河口、あるいは渡津地。

\*4 「平」、(新)、(岩)とも、以下三地名未詳とする。

\*5 金沢市内の犀川河口の地。



ゆく。三国港の商人が、値が高くなったら売れよとて、敦賀の津へと買ってゆく。敦賀の津の商人が、(照手は) 何の能力もない、手に職もないということ、海津の浦へと買ってゆく。海津の浦の商人が、値が高くなったら売れよとて、大津の上り大路へと買ってゆく。この上り大津の商人が、値が高くついたとって売ったりしているうちに、面白い物が興味をひいたのか、(価が高い方に) 後先構わず売るうちに、美濃の国青墓よろずの宿、万屋という遊女屋の主人が、代金かさんで十三貫文で買いつたのが、もろもろの哀れの極みと人々は伝え聞く。

遊女屋の主人は(照手を) ご覧になって、「ああうれしいことよ。遊女勤めの女子百人を抱えなくても、あの姫一人持ったらば、むしろ夫婦は、安樂に暮せてうれしいことこの上ない」と、一日二日は、心よく寵愛なされるが、ある雨の日のことに、姫を自分らの前に呼んで、「のう、どうだ姫よ。この内では、国の名をつけて(奉公人)を使うのがないだが、お前の国をいいさい」と申される。

照手はこの由をお聞きになって、常陸の者と申そうか、相模の者と申そうか。せめて夫の故里なりと名をつけて、朝夕その名で呼ばれては、夫と連れそっているような気持ちにもなろうかと思われて、こぼれる涙をこらえては、「常陸の者」とのお返事である。主人はこれをお聞きになって、「そういうことならば、今日よりお前の名をば、常陸の小萩と名付けるから、明日からは、ここから鎌倉、関東への、下り上りの商人どもの、袖をも引きとめ、代りのお茶の注文をとって、われら主人夫婦をも、安気に養護しておくれ」と、十

二単一式ひとえを与えられる。

照手はこの由をお聞きになつて、さては遊女勤めをせよということよね。今遊女勤めをするとなれば、墓の下にいらつしやる、夫の小栗殿が、さぞや無念に思われるでしょう。なんとか言い訳をして、遊女勤めだけはすまいと思われて、「ねえ、いかがでしょう、ご主人様。私は幼少で、両親に先立たれ、善光寺詣りをしようとして、道中人にさらわれて、あっちこつちと売られてきましたのも、体内に悪い病気がございますからで、男の肌に触れると、必ず私の病が感染します。悲しいことに病が重くなれば、（その分自らの）値が下るのは当然のことです。値の下がらぬうちに、どこへなりともお売りになつて下さい」。

照手、下の水仕となる

主人はこのことをお聞きになり、両親に先立たれたのではなく、夫に先立たれ、どうも賢女ぶっている女らしい。どう操を立てようとも、手厳しく言い付ければ、（いやとはいまい、何とかして）遊女勤めをさせようと考えて、「のう、どうだ常陸の小萩殿。明日になれば、ここから蝦夷、佐渡、松前などに売られて（その上）、足の腱を断ち切られ、日に一合の食事をし、昼は粟をついばみにくる鳥を追ひ、夜は海に投げ入れられて魚や鮫の餌になろうつもりか。（それとも）十二単で身を飾り、遊女勤めをするか、さあ遠慮なく選べ、常陸の小萩殿」とのお達し。照手はこの由をお聞きになつて、「ばかげたことをおつしやるよ、ご主人殿。たとえ明日には蝦夷、佐渡、松前に売られて、足の腱を断ち切られ、日に一合の食事をし、昼は粟をついばむ鳥を追ひ、夜には魚や鮫の餌になるとして

も、遊女の境涯には、決して身をおとしますまいよ、ご主人様」。

遊女屋の主人はこれを聞き、「憎きことを申すよな。やあ、どうだ常陸の小萩よ。さてここの内では、百人の遊女がいるのだが、その下の水仕事は、十六人で手分けしている。その十六人の下の水仕事を、お前一人でなさるか。（それとも）十二単で身を飾り、遊女勤めをなさるか。遠慮なくはつきり選べ、小萩殿」。

照手はこの由をお聞きになって、「ばかげたことをおっしゃるよ、ご主人殿。たとえこの私に、千手観音の千本の手があったとして、その十六人の下の水仕事は、私一人してできるものですか。（しかし）お聞きすればそれも女人の職種とか。たとえ十六人の下の水仕事をいたすとも、遊女勤めは、決していたすますまいよ。ご主人様」。ご主人はこれを聞き、「憎きことを申すよの。そういう心算であるのなら、さあ下の水仕事をさせてやろう」とて、十六人の下の水仕事を、一せいにやめさせて、（仕事は）照手の姫に渡される。「下る駄馬が五十匹、上る駄馬が五十匹、百匹の馬が着いたよ。糠を与えよ。百人の馬子どもの、洗足の湯、手や顔を洗う水、ご飯の用意をせよ。十八町向うの野中にある、お茶の清水を汲み上げよ。百人の遊女の、足の湯、手水に、髪をすき整えに参れ、小萩殿」。こつちへ常陸小萩、あつちへ常陸小萩と（散々）召し使えども、なにぶん照る日月の申し子のこととて、千手観音が身边を離れず立っていらつしやるので、以前の十六人の下の水仕事より、（仕事の）片づけが速くていらつしやる。

ああおいたわしい照手の姫は、それを難儀ともお思いなさらず、いつもの立居振舞の度

に念仏をかかさず唱えられるので、遊女たちはこれをお聞きになって、「年若い女性が、来世の安樂のためにけなげにも懸命にお勤めしているから、さああだ名をつけて呼びましよう」とて、常陸小萩に代えて、念仏小萩とお付けなさる。

あちらへ常陸小萩よ、こちらへ念仏小萩よと、召し使ううちに、卑しい者がする縄だすき襷たすきをして、人に言われるままに働くので、襷をゆるめる暇もない。御み髪ぐしの黒髪に、櫛の齒の入った様子も全くない。こうしたおつくうな奉公を、三年もの間なされたのは、もろもろの哀れの極みとして広く人々に知れわたっている。

以上は照手の姫の御物語、それはさておき申して、とりわけ哀れをとどめたのは、あの世にいらっしやる、小栗十一人の殿方たちのことで、もろもろの哀れをとどめている。閻魔大王様はご覧になって、「だから言わぬことじゃない。悪人どもがやって来おった。あの小栗と申すやつは、人間界にありし時は、善人にはほど遠く、悪人にはもつとも近い、大悪人の身なので、あいつを、阿修羅道へ落とそう。十人の殿方たちは、主人に係り合い、非業の死だということなので、彼らをもう一度人間界へと戻して取らせよう」とのお達しである。

十人の殿方たちはこれを聞き、閻魔大王様のところへいらっしやって、「のう、どうでしょうか大王様。我ら十人の者どもが、人間界へ戻って、本望を遂げることがはきわめて難しい。あの主人の小栗殿を一人、（人間界に）お戻し下さるならば、（あなた様は）我々の本望までかなえてくださることにきつとなる。我ら十人の者どもは、浄土へならば浄土へ、

阿修羅道ならば修羅道へと、罪に従つてお遣わしになって下さい、大王様」と申される。

大王はこの由をお聞きになって、「おお汝らは、主人に孝心ある者たちであるなあ。そういう心算だということならば、さあ後々のがみに、十一人皆、（人間界へと）戻してやろう」とお思いになって、あゆるものを見ぬく目をもった鬼を御前に呼んで、「日本に死骸が残っているか見て参れ」とのお達しである。（地獄の鬼は）「承知しました」とばかり、地獄の高山に登り、にんは杖という杖で、虚空をぱつと打つと、日本は一目で見える。閻魔大王様のところへ参つて、「のう、大王様よ。十人の殿方たちは主人に係り合い、非業の死を遂げたということで、その体は火葬に付し、死骸がございません。小栗一人は名大将ということなので、この体を土葬に付し、体が残っております。大王様」と申します。

大王はこのことをお聞きになり、「それでは後々のがみにと、十一人皆（人間界へと）戻してやろうと思ったが、死骸がないとなれば仕方ない。その十人の殿方たちも阿修羅道へ落すこともあるまい。我らの左右に侍する冥途の仏としよう」と、五体ずつ両脇に、十王十体とお祭りになって、今も後世の衆生をお守りになっておられます。

「そうならば小栗一人を戻せ」と、閻魔大王様の自筆の御判をお押しになる。「この者を藤沢のお上人で、明堂聖みどうせいの一のお弟子に渡し申す。熊野本宮湯の峰に入れてやつて下

\* 「平」、「新」、「岩」とも、未詳とする。

さるならば、浄土から菓の湯を沸き上げよう」と、大王様の自筆の御判をお押しになる。大王様がにんは杖という杖で、虚空をぱつとお打ちになると、あらありがたや、築いて三年になる小栗の塚が、四方に割れて裂け、卒塔婆はぱつと前へ倒れ転がって、群鳥があざけるように鳴く。

藤沢のお上人は、なんと方へいらつしやるが、上野が原に、無縁の者がいるのか、鳶かまびすや鳥が喧かまびすしいと思ひ、立ち寄つてご覧になると、ああおいたわしい小栗殿、髪は白くぼさぼさ、足手は糸より細く、腹は全く毬まりをくくつたようで、それがあちこちごそごそと這い廻つてゐる。両手をあげて、何か字をかくしぐさをなさる。「かせ\*2にやまい」と書かれたのは、六根かたわなど読みとるべきか、さては昔の小栗、小栗の蘇もみがえりなのであつた。この（蘇りの）ことを横山一門に知れては大変と思われて、（頭を）押さえて髪を剃り、その姿が餓鬼そっくりなので、餓鬼阿弥陀仏と命名した。

上人が、小栗の胸札をご覧になると、閻魔大王様自筆の御判が押されてあつて、「この者を藤沢のお上人で、明堂聖の一のお弟子に渡し申す。熊野本宮の湯の峰に入れてやつてくだされ、熊野本宮の湯の峰にお入れ下さるものならば、浄土から菓の湯を送り奉る」と、閻魔大王様自筆の御判がしるされている。「ああありがたいお言葉」と、お上人もその胸

\*1 〔平〕、〔新〕、〔岩〕とも、未詳とする。誤写等があるか。

\*2 〔平〕、〔新〕、〔岩〕とも、未詳とする。〔岩〕に新たな仮説があるが、要検証。

札に、書き添えを施される。「この者を一曳き曳けば千僧供養、二曳き曳けば万僧供養」と書き添えられ、土車を作り、この餓鬼阿弥をお乗せ申して、雌綱と雄綱を組んで車に付け、お上人も車の手縄をしっかり握って、「えいさらえい」とお曳きになる。

上野が原から曳き出す。相模なわてを引く折は、横山家中の侍たちは、（この餓鬼阿弥が）敵の小栗とは知らないで、照手姫のために曳こうよと、因縁深い車の手綱にしっかりつかまって、五町ばかりお曳きになる。末はどうかと問うたらば、九日峠\*1やらとかよ。坂はなけれど酒匂の宿よ。小磯の森を「えいさらえい」と曳き過ぎて、はや小田原に入ったので、せはい小路\*2にはけの橋、湯本の地藏よと伏し拝み、足柄箱根はこのことかと、山中三里四つの辻、伊豆の三島や浦島よ、（沼津の宿の）三枚橋を、「えいさらえい」と曳き渡って、流れをとめる浮島が原、小鳥さえずる吉原の、富士の裾野をまっすぐに上り、はや富士川で（禊齋して）水垢離をとり、大宮浅間富士浅間、心を静めて伏し拝み、口をきけぬ餓鬼阿弥に、「さらばさらば」と別れを告げ、（お上人は）藤沢をさして帰ってゆく。

あとは施主や信者がついて曳いてゆくうちに、吹上の六本松はこのことか、清見の関のところ立って、南を遙かに眺めると、三保の松原、田子の浦、袖が浦の一つ松、あれも名所か絶景かな。あの名勝地として名高い清見寺。江尻の細道を曳き過ぎて、駿河の国

\*1 〔平〕、〔新〕、〔岩〕どれも未詳とする。

\*2 〔平〕、〔新〕、〔岩〕どれも未詳とする。

府の内に入つてくると、(昔はないが)今浅間、君のお出では有り難や、(蹴上げて通る)丸子の宿。(雉がほろほろと羽ばたきして鳴く)宇津の谷峠を曳き過ぎて、岡部噺をまっすぐ上り、(松にからまる)藤枝の、(四方に海はないけれども)、島田の宿を「えいさらえい」と曳き過ぎて、(七瀬流れて八瀬落ちて、水嵩が)夜の間に変わる大井川、(鐘を麓で聞く)菊川の、(月をさし昇らせる)佐夜の中山。日坂峠を曳き過ぎて、(雨が激しく降って路はぬかるみ、土車に情を掛けて引いてくれた人も、今日は情を掛けてはくれぬ)掛川を、「えいさらえい」と曳き過ぎて、袋井噺を曳き過ぎて、(花は)見付の郷に着く。

あの餓鬼阿弥が、(明日の命を知らねども)、今日は池田の宿に着く。(昔はないが今切の)両浦眺める潮見坂、吉田の今橋を曳き過ぎて、五井の依田橋とはこのことか。(夜はほのぼのと)赤坂の、(糸を巻きつけて)矢作の宿、三河に架けた八橋の、(蜘蛛手にあれこれ思い乱れるなあ。沢辺に匂う杜若、花は咲かぬが実は)鳴海、頭護の地藏よと伏し拝んで、(一夜の宿を取れなくて、未だ夜は深き)星が崎、熱田の宮に土車は着く。

土車を曳く施主がこれを見て、これほど涼しき宮を、誰が熱田などと名付けたものか。熱田大明神を曳き過ぎて、(坂はなけれど)尾頭坂、(新しけれど)古渡、(縁の苗を植え付けて)黒田と聞くと(いつも豊作が予想され頼もしい)この宿よ。抗瀬川の川風が身に冷たくしみるよ、さて、小熊河原を曳き過ぎて、お急ぎになったので程なく、土車を誰もまるで曳いているとは思わぬうちに、(この車は)功德のための車のこととて、美濃の国青墓の宿、万屋という遊女屋の主人の門の前につき、何たる因果の縁やら、車は三日、



曳き手なくついに停まったままとなる。

ああおいたわしい照手の姫は、お茶の清水を汲み上げにいらつしやるが、この餓鬼何弥を、ご覧になって、口説きごとこそ哀れである。「夫の小栗の殿様が、たとえあの様な姿になつても、この世に生きていて下さったなら、どれほど自分が辛苦をなめても、辛苦とは思わぬものを」と、土車に近寄つて、男の胸札をご覧になる。「この者を一曳き曳けば千僧供養、二曳き曳けば万僧供養」と書いてある。

ああ、せめて一日の車道、夫の小栗の供養に曳きたいもの。そしてもう一日の車道、十人の殿方たちのために曳きたいもの。（合せて）二日曳いた車道、きつと一日で戻るから、せめて三日の暇が欲しいこと。御機好のいい時を見計らつて、暇をお願いしてみようと思われて、遊女屋の主人のところへいらつしやつて、本当にまあ、そうそう、ご奉公をするようになったあの時には、夫はいないといったのに、今夫のためなどと言おうものなら、暇などもらえまいと思われて、この世に存命の両親のためにとみせかけて、暇をもらおうと思われて、ご主人のところをいらつしやつて、「ねえ、どうかご主人様。門前の餓鬼何弥の、胸札を見ますと、『この者を一曳き曳けば千僧供養、二曳き曳けば万僧供養』と書いてございます。さて一日の車道、父のために曳きたいもの。そしてもう一日の車道、母のために曳きたいもの。二日曳いた車道、きつと一日で戻りますから、どうかお情けに三日の暇をいただけましたら」。

ご主人はこれを聞き、「おまえは何とも憎らしいことを申すよな。あの時遊女勤めをせ

よと言った折、そうしていたなら、三日とはいわず、十日でも暇をくれてやろうが、鳥の頭が白くなり、馬に角が生えようと、暇をとらすなどもつての他、常陸小萩よ」と申される。

照手はこの由をお聞きになり、「ねえ、どうでしょうご主人様、これは例えてございますが、費長房、丁令威は、鶴の翼に宿を借りるとか。達磨様は大昔、蘆の葉を宿りになさったとか、張博望の大昔は、浮き木を宿りになさったとか。旅は心、世は情けとか申します。そのように廻船は浦がたより、捨て子は村あげての育はぐみよ。木があるからこそ鳥も棲み巢を営む。港があるから舟も入る。時雨村雨時の雨宿り、これも衆生の縁とやら。もし私に三日の暇をくださるならば、もし後世、ご主人夫婦の御身の上に、何か大事が起こるようなことがあったその折は、それに引き代わり私が、身代りになってさしあげます。ですからどうぞお情けに三日の暇をくださいまし」。

ご主人はこれを聞き、「おまえはよくも優しいことを言うよのう。暇などもつての他と思うけれど、もし後世、われらが夫婦の身の上に、何か大事が起こったその折には、われらの身代わりになろうと申した、(その)一言に感じ入った、慈悲と情けを大ぶるまいして、おまえに五日の暇をやろう。(そのかわり)一日でも遅れようものなら、両親もろとも、無間地獄むげんに落としてやる。さあ、行って車を曳け」と申される。

照手はこれを聞くが早い、余りのうれしさに、裸足のまま走り出て、土車の手綱にすがりつき、一曳き曳いては千僧供養、夫小栗の御ために、二曳き曳いては万僧供養、これ

は十人の殿方たちの御ためにと、よくよく十分に霊を弔う回向をなされるが、人は私のことを、姿顔立ちがいいとうわさするので、町家の多い所や宿場や関所関所で、浮き名を立てられてはいけないうと、再び主人の家にかけ戻り、古い烏帽子をもらい受けて（頭に被り）、（それを）布の切れはしで髪に結わえ付け、丈なす黒髪をさつと乱し、顔には油煙の墨を塗り、着ている小袖を肩までたくし上げ、笹の葉には幣ぬきをつけ、本当には狂ってはいないけれど、姿を狂気に装って、「曳けよ曳けよ子供ども、物に狂って見せましよう」と、姫は涙ながらに垂井の宿、美濃と近江の境の、長競けたくるぎ、二本杉、寝物語の里を過ぎ、犬上川の高宮河原を過ぎ、そこで鳴く雲雀ひばりが、姫をいたわるよ優しいこと。（御世は治まる）武佐（者）の宿を過ぎ、鏡の宿に土車は着く。

照手はこの由をお聞きになって、人は私の心を鏡のように明るいと言うがよろしい、姫の心はこの当座は、あれこれと、あの餓鬼阿弥のことで、心が闇のようにかき曇り、鏡の宿の見分けもつかず（過ぎゆくうちに）、（姫の着物の裾に朝露が浮かぶことなく）草津の宿、野路、篠原を曳き過ぎ、三国一の瀬田の唐橋を「えいさらえい」と曳き渡し、石山寺の夜の鐘、高く聞こえてことさらである。馬場、松本を曳き過ぎて、お急ぎになったので程なく、西近江に名高い、上り大津よ関寺よと、玉屋の門に車が着く。

照手はこのことをご覧になって、あの餓鬼阿弥に添いなれたとはいふものの、それも今夜もう一晚のことと思われて、別のところに宿を取るまでもない（と思い）、この餓鬼阿弥の車の轍を枕とし、八声の鳥などいらないけれど（八声でなく鶏のように）、夜もすがら

泣いて明かした。

明け方東の空も白む頃、（照手は）玉屋にいらつしやつて、料紙と硯をお借りして、この餓鬼阿弥の胸札に、一筆書き添えられたことではあつた。「東海道七か国に、車を曳いた人も多いでしょうが、美濃の国青墓の宿、万屋の遊女屋の主人の水仕女、常陸小萩という女、青墓の宿から街道を上り、大津、関寺までこの車を曳いてきました。熊野本宮の湯の峰に入湯し、この人の病が全快いたしましたら、お帰りの折には、きつと一夜の宿をお貸しします。（どうぞその願いがかないますよう）くれぐれもよろしくお願い申し上げます」とお書きになる。

小栗、熊野の湯に入る

いかなる因果か、蓬萊山のお座敷で、夫の小栗と死に別れ、今この餓鬼阿弥と別れるのも、いずれも思ひは同じ、ああこの身が二つ欲しい。一つの身は、あの主人のもとに戻したい。もう一つの身はね、この餓鬼阿弥の車をこのまま曳いてさし上げたい。心は二つ身は一つ。（餓鬼阿弥の姿を）しばし名残を借しんで見送っていたが、やむなく引き返し、お急ぎになったので程なく、青墓の主人の元にお戻りになったのは、哀れなことであつた。車の曳き手はひきをきらず、上り大津を再び曳き出る。逢坂の関、山科に土車は着く。（物憂き旅に）栗（会は）田口、京の都にたどり着く。東寺、三社、四つの塚、鳥羽の恋塚、（秋の山、月の宿りはないけれど）桂川を「えいさらえい」と曳き渡し、山崎千軒曳き過ぎて、（これほど狭いこの宿を、誰が）広瀬と名付けたか。（塵かき流す）芥川、太田の宿を「えいさらえい」と曳き過ぎて、中島や三宝寺の渡りを曳き渡し、お急ぎになった

ので程なく、天王寺に到着する。

「(三水四石の) 七不思議の有様を、拝ませたいとは思うけれど、耳も聞こえず目も見えず、ましてや口もきけぬ身は、帰りにゆつくり拝めよ」と、阿倍野五十町曳き過ぎて、住吉四社の大明神を通り過ぎ、堺の浜に車が着く。(松は植えぬが) 小松原、渡辺、南部を曳き過ぎて、四十八坂、長井坂、糸我峠いとがや蕪坂かぶろ、鹿瀬しかせを曳き過ぎ、(心を傾けるのは) 仏坂、こんな坂に車は着く。

こんな坂についたけれど、これから先湯の峰への道のりは、道が険しくて車では通れない。ここで餓鬼阿弥の土車は止まったまま。そこへ大峰入りの山伏たちが百人ばかり、にぎやかに声を立てて通りかかった。山伏たちは、この動けない餓鬼阿弥を見て、「さあこの者を、熊野本宮の湯の峰に入れてやろう」と、土車をうち捨てて、籠を作り、中に餓鬼阿弥をお入れして、若い先達が背中にしつかりと背負われて、上野が原を出発して、日々を積算してみると、四百四十四日かかったということで、熊野本宮湯の峰にお入りになる。なにしろ愛洲薬あいすの名湯ということで、入湯七日で、両眼が開き、二七の十四日で耳が聞こえ、三七の二十一日ではや口もきけ、その上七七の四十九日には、身の丈、六尺二分、完全にもとの小栗に再生した。

小栗は長い夢から覚めた思い、熊野三山をへ巡っては、お詣りをし霊湯を浴びなさるが、熊野の権現はこれをご覧になって、「あのような大剛の者に、金剛杖を買わさないでは、末法の世に買う者などいまい」と、仙人に身を変じ、小栗に二本の金剛杖を見せ、「のう、

どうだ修行者よ、熊野に入山した印に、何を証しとするのか。印にこの金剛杖を買え」とのお言葉である。

小栗殿は、昔の威光をとり戻して「さてこの私は、東海道七か国を、餓鬼阿弥と呼ばれて、土車に乗せられて曳かれるにまかせたことさえ無念に思うのに、金剛杖を買えとは、さては拙者を呪う気か」とのお返事。

権現様はこのことを聞きになって、「いや、そうではない。この金剛杖というのは、（汝が）この世に出た折に、弓とも楯ともなつて、出世の運を開く杖であるので、お金がなければ、ただでくれてやる」といいおいて、権現は二本の杖をその場において、忽然と消えた。小栗はこれを見て、「さては権現様であられたか、手に取ることに目前で拝めたことのありがたさよ」と、小栗は三度礼拝し、そのうちの一本をついて、都を目ざして出発される。

小栗、両親に会う

都では、遠くからでも、父兼家殿の館を見ていきたいと思われて、門の内に入つて、「齋料」と声をかけた。その時の番人の左近の尉が応待する。左近は小栗を見るが早いか、「のう、修行者よ、お前のような者が、門内に入るとは厳禁である。さつさと出てゆけ。出てゆかねばこの左近の尉がたたき出してやる」と、もった箒でたた出す。小栗はこの様をみて、憎いのは左近の仕打ちよ、仕打ちも道理、知らぬも道理と思われて、八条の原へとお出かけになる。

折しも兼家の邸内には東山の伯父御坊が来ていて、彼は華縁行道をして（小栗の命日

の）供養していたが、ついさっきの修行者を一見して感じるところがあり、彼は兼家の御台所を近付けて、「のう御台所よ。わが一門にかぎって、額に『米』の字が三体あらわれ、両方の目に瞳が四つあると思つてゐるが、今来た修行者もそうであつた。ことに今日は小栗の命日ではないか。呼び戻し、齋料を施されよ、左近の尉」とのお言葉である。

左近はこの由を聞き「承知いたしました」と、急いで飛び出して（小栗の後を追ひ、彼に追いついて）、「のう、どうか修行者どの、お戻り下さい。齋料を差し上げよう」と申される。小栗殿は、昔の威光が戻つて、「それがしは、一度追ひ出した所へは行かぬが主義」とのお言葉。

左近はこれと聞き、「のう、修行者様よ、あなたがそうして諸国修行なされるのも、一つには人を助けよう、あるいは自身も助かりたいと、お祈りなさつてゐるからではありませんか。今あなたがお戻りなれば、この左近は死なねばなりません。お戻りになつて齋料をどうぞ受け取られて、この左近の命も助けて下さいよ、修行者様」と申します。

小栗はこのことをお聞きになつて、名乗り出ようと思つて、大広庭にさしかかり、座敷の間の障子をさつとあけ、深々と八分まで下げる頭を完全に地につけて、「のう、いかに母上様、これがかつての小栗でございますよ。三年間の勘当をどうぞ許して解いて下さい」。御台所は大層喜ばれ、このことを兼家殿にそのままお伝えになる。

兼家はこの由をお聞きになつて、「軽率なことを申すでない御台よ。わが子小栗は、ここからはるか相模の国の横山の館にて、毒殺されたということだが、しかしその修行者が

わが子の小栗だというなら、幼児から教えこんだ兵法がある。失礼だが、それをひとつ受けて見よ」と、五人張り、十三束の弓に二股の矢をつがえて、間の障子のかなたから、引き絞ってひょうと放つ矢を、小栗は一の矢を右手に、二の矢を左手に取って、間近く真つ向うから来る三の矢は、前歯でかちつと噛み止めて、三本の矢をしつかと押し握り、間の障子をさつと開け、頭をすっかり地につけて、「のう、どうか父上、あの小栗でございませう。三年間の勘当をどうぞお許しください」。

兼家殿も母上も、一度は死んだ我が子に、会えるなどとは、ほとんどありえないことだと、喜びの中にも、飾りたてた車を五輛仕立てて、親子連れで、帝の前に参内する。

帝はこの様をご覧になって、「誰というとも、小栗ほどの大剛の者は決していまい。そこで所領を与え取らせようと、山城、大和、河内、和泉、摂津の五畿内五か国の永代安堵の、薄墨紙に記した御綸旨に御判を押して賜った。小栗はこの由をお聞きになって、「五畿内五か国は望みはいたしません、それより美濃の国にお代えください」と言上する。帝は覧まして、「大国に代えて小国を望むのは、考えるところがあるのだろう。それならば、美濃の国を馬の飼料に与えよう」と、重ねて御判を賜った。

小栗はこの由をお聞きになって、「ああありがたいことよ」と山海の珍物国土の菓子調べて、お喜びは限らない。小栗殿は高札を書いてお立てになる。「あの小栗に奉公したい者があれば、知行に所領を与えよう」と、高札書いてお立てになると、「あの小栗殿に奉公しよう。判官殿の家来に」と、三日の間に三千余騎が馳せ集まったとか。



三千余騎を従えて、美濃の国への所知入りとのお触れがでる。三日先の宿にするという通知が、遊女屋の主人のもとに行つた。主人はこれをご覧になって、百人の遊女を、一か所に集めて、「おまえら遊女たちに申します。ここへ都から所知入りのご一行がこられるということ、（おまえたちが）出迎え、十分に旅の憂き目をお慰め申して、その見返りに所領を賜つて、われわれ夫婦を榮に過ごせるようにしてほしい」（姫たちは）十二単で身を飾り、今か今かとお待ちになる。

三日後、犬の鈴、鷹の鈴、それに轡の音がざざめいて、上から下まで華やかに、ゆつたりと装い出立されて、いよいよ小栗一行が遊女屋に到着する。百人の遊女たちは、我先に出迎え、（小栗を）慰めようとなさるが、小栗殿は少しもお氣持がはずまない。ご主人夫婦を御前に呼ばれ、「やあ、ご主人ご夫婦よ、こちらの内の下の水仕女に、常陸小萩という者はいるか。すぐにお酌に來させよ」とのお言葉である。主人は「承知いたしました」と、常陸小萩の所へいらつしゃつて、「のう常陸小萩殿よ、おまえの器量のよいことが、都の国司様にもれ聞え、お酌に出よとのこと、すぐにお行きなさい」とのお言葉である。

照手はこのことをお聞きになって、「愚かなことをおっしゃいますね、ご主人様。いま、お酌に出るくらいなら、はじめからとうに遊女勤めをしております。お酌などは参りません」と申される。主人はこれを聞き、「のう、どうだ小萩殿よ、さても御身は、嬉しいことと悲しいことは、いとも早う忘れるよな。以前、餓鬼阿弥といって、（その）車を曳

かせてほしいと（御身が暇を）請うた時、暇などやらぬと申したら、もし後々、ご主人夫婦の身の上に、大事が起ったその折は、かならず私が身代わりになりますといった、その一言により、慈悲に情けを大まけして、五日の暇を取らしてやったが、今御身がお酌に出てくれないければ、わたしたち夫婦は、自害ものです。ここを何とかとりはからつてくれな  
いか、小萩殿」と申します。

照手はこれを聞き、一言の道理につまんで、何とも口がきけず、本当にまあそうそう私は、以前、車を曳いたのも、夫の小栗のためであった。今、お酌に出るのも、夫の小栗のためである。（小栗殿よ）お恨みなさいますな。夫を思う心に変わりはないと、氣を取り直し、「ねえ、ご主人様、そういうことでございますなら、お酌に参りましょう」とのお言葉。

主人はこれを聞き、「何とうれしいことよ、そうと決まれば、十二単で飾ってゆけ」と申します。照手はこれをお聞きになって、「とんでもないことをおっしゃいますね、ご主人様。遊女勤めの女であれば十二単もいるでしょう。下の水仕にそんなものはいりません。普段着のままで伺います」と、襷がけの身なりで、前垂したまま銚子をもって、小栗の前にお酌に出る。

小栗はこの様子をご覧になって、「常陸小萩とはあなたのことですか。常陸の国の誰の娘さんか。お名乗り下さい、小萩殿」、照手はこれをお聞きになり、「私は、主人のいいつけでお酌に参りました。はじめての方に身の上話などしに来たではありません。お酌が

「おいやなら控えております」と、銚子において、お酌の場から引きさがられる。

小栗はこの様子をご覧になって、「いかにもそのとおり小萩殿、人の先祖を聞こうとすれば、まず、自分の方から言うのが礼儀というもの。かくいう私は常陸の国の小栗と申す者、相模の国の横山殿の一人娘、照手姫に恋慕し、推参して婿入したのがけしからぬと、毒の酒を盛られて殺されましたが、十人の武将たちの情けによって、生き返ることができ、餓鬼阿弥と呼ばれて、東海道七か国を、土車に乗せられて曳かれてゆくその折に、その七か国で車を曳いてくれた人は多くいるが、中でも、美濃の国、青墓の宿、万屋という遊女屋の下の水仕女、常陸小萩という姫は、『青墓の宿から、上り大津や関寺まで、車を曳いてさし上げました。熊野本宮湯の峰に浴し、病氣全快のその時は、帰りの折一夜のお宿をさし上げます。くれぐれもよろしく』と書いて下さった。胸の木札は、これこのとおり」と、札を照手の姫にわたし、「そのご報恩のために、ここまでお礼に参りました。常陸の国では、どなた様の姫御か。お名乗りください。小萩殿」。

照手はこの由をお聞きになって、一言ものも言えず、ただ涙にむせていらつしやる。

「先に、私は常陸の者と申しましたが、常陸の者ではございません。実は相模の国、横山の一人娘、照手姫でございます。（父は）人の子を殺して、我が子を殺さずには、都の外聞上体裁もあると考えて、（父が）鬼王、鬼次の兄弟の者どもに、『川に沈めにかけて』といいつけられましたが、その兄弟の情けで、その難を免れたものの、全国あつちこつちと売られ売られて、余りのことの悲しさに、思いかえして数え上げてみると、四十五

回に及びますが、ここの主人に買い取られ、遊女勤めを拒んだ罰として、十六人分の水仕事を、私一人でこなして参りました。小栗様に再会できてうれしこと」。どう振る舞ったらいいものやら、気も動転して茫然自失の態。

小栗はこのことをお聞きになり、主人夫婦を御前に召され、「よお、主人夫婦よ。人を使うも事情によりけり、十六人分の水仕事はどうして一人できるのか。汝らごとき邪見者は死罪だ」とのお言葉。

照手はこの由をお聞きになって、「ねえ、どうでしょう小栗殿。主人は邪見どころか、慈悲深い人でした。恩賞の領地をお上げになって下さい。なぜかと申せば、あなた様、あなたの前世の餓鬼阿弥の車を曳くとき、三日の暇を願い出ましたところ、五日間の暇を賜りました。その慈悲第一の主人に、どうか是非所領の地をお与え下さいませ、小栗殿」とのお言葉。

小栗はこの由をお聞きになって、「そういうことであれば、御恩にあずかった妻に免じて許す」と、その主人に美濃の国十八郡が与えられ、一切自由に扱わせる上に、所領の事務を総括する役所の長官に任じる。主人はそれを承り、「何とありがたいことよ」と、山海の珍物に国土の菓子を調べて、喜ぶこと限りがない。主人は百人の遊女の中から、三十二人を選びぬき、玉の輿に乗せて、照手の姫の女房にと差し上げた。女は家柄が卑しくて、富貴の人の愛を得れば、尊い地位に栄達できるとは、このたとえのことをいうのだ。

小栗は領国常陸国にお入りになり、その勢七千余騎で、横山攻めとのお触れが回った。

横山はあつとばかり肝をつぶし、「あの小栗が生き返り、横山攻めに来襲とのこと、ならば城郭を構えて、万全の防備を」と、空堀に水を入れ、逆茂木さかもぎの柵を引き並べて、用心深く待ちうけた。

照手はこのことを伝え聞き、夫の小栗のところにいらつしやつて、「ねえ、どうか小栗殿、昔から伝え聞いておりますが、父や母の恩に背き、（合わせて）十二の逆縁を得ると聞いただけでも悲しいと思うのに、まして今自らが世に栄達を得たからといって、父に弓を引くことは、どうぞ思い止まって下さい、小栗殿。どうか明日の横山攻めを、中止なさせて頂きまし、それが許されない場合は、横山攻めの門出に、自ら血祭にあげられ（犠牲となった）その後で横山攻めをなさって下さい」。

小栗はこれをお聞きになつて、「そういうことならば、恩の妻に免じて（横山攻撃を断念する）」とのお言葉。照手姫は大そう喜ばれ、「そうして下さるのなら、今までどおり夫婦の間柄のまま、あなたのお怒りを晴らすことの申し入れを父にいたしましょう」と、内々の事情を細かく書いて、横山殿にお送りなさる。

横山殿は、照手がしたためた委細を報じた手紙を、さつと広げて目を通される。「昔から今に至るまで、七珍万宝のあなたの宝より、子に勝る宝はないと、今こそ思い知った。今は何を惜しむべきものもない」と、十駄\*の黄金に、鬼鹿毛の馬を添えて、小栗に贈った。

\* 駄馬十頭で運ぶ荷、一駄は約四十貫、しめて約四百貫。

すべては三男、三郎の仕業であると、三郎に七筋の縄をかけ、小栗殿のもとへ送った。

小栗はこれをご覧になって、「恩には恩をもつて報じ、恨みには恨みをもつて報いる。十駄の黄金は、不要である」とて、黄金の御堂と寺を建て、また鬼鹿毛の姿を黒の漆で固めて、馬頭観音として祭った。牛は大日如来の化身としてこれも大切に祭った。これもなに故ならば、三男の三郎の仕業だと、三郎を簀巻きにして、西の海の柴漬<sup>ふ</sup>けにと水中に投げ入れる。舌先三寸で五尺の自分の命を失うことを悟らなかつた三郎の愚かさよ。

それからゆきとせが浦にお渡りになり、最初に姫を人買いに売った貪欲な婆<sup>ばば</sup>は、肩から下を土中に埋め、首を竹鋸で引かせた。夫の太夫殿には領地を与えた。

それから小栗殿は、常陸の国にお戻りになって、棟には棟重ね、門には門を連ね、富貴繁盛、二代にわたる大長者として繁栄をきわめる。

その後生者必滅の習い、小栗は、八十三歳にして大往生を遂げる。神仏の計らいによって、小栗ほどの真に大剛の武人は神として崇め祭り、末世の衆生に拝ませることに決し、そのために、小栗殿をば、美濃の国安八の郡墨俣に、<sup>\*</sup>たるいおなことの神体は正八幡、荒人神として祭られることとなった。同じく照手の姫も十八町下に、契り結ぶの神として祭られた。この契り結ぶの神の御本地も、ようやくここに語り納めとするが、所も繁盛、御代もめでたく、国も豊かにまことにおめでたい次第である。

(完)

\*〔平〕、〔新〕、〔岩〕、どれも未詳とする。